

まちかねやま
待兼山遺跡現地説明会資料

大阪大学埋蔵文化財調査委員会

はじめに

大阪府豊中市待兼山町、大阪大学石橋団地(通称：豊中キャンパス)に所在する待兼山遺跡は、千里丘陵の西端をなす待兼山丘陵上に位置し、丘陵からは猪名川流域の西摂平野、六甲山系を広く臨むことができます。また、麓の低地は能勢街道と西国街道が交わる交通の要所です。

待兼山丘陵は考古学研究者の間では戦前から考古資料の出土する地区として知られていましたが、1983年、理学部ラジオアイソトープセンター建設工事の際に、弥生時代の集落跡が見つかり、丘陵一帯が「待兼山遺跡」として国の文化財台帳に登録されました。以後、キャンパス整備工事などの際に発掘調査が行われ弥生土器、須恵器、埴輪古代土器棺などの考古資料が相次いで発見されています。

今回の発掘調査はキャンパス内の環境整備を目的とした「待兼山周辺修景整備工事」に先立つ事前調査として実施しました。

調査主体：大阪大学（大阪大学埋蔵文化財調査委員会）

調査原因：「待兼山周辺修景整備工事」に先立つ事前調査

調査担当：大阪大学埋蔵文化財調査室

調査期間：2005年7月25日～10月末（予定）

調査地点：大阪府豊中市待兼山町(大阪大学石橋団地(豊中キャンパス)待兼山修学館南)



図1 大阪大学豊中キャンパスと待兼山5号墳

2 調査の成果

待兼山5号墳は、5世紀後半に築造された直径15mの円墳であることが判明しました。

大阪府北西部（豊能地域）において古墳時代前期～中期（3世紀中頃～5世紀）にもっとも優勢であったのは、当古墳群の南約3km、天竺川と千里川に挟まれた豊中台地に位置する桜塚古墳群（豊中市岡町周辺）の勢力であったことは、広く知られています。一方、待兼山古墳群は箕面川流域を基盤とする勢力の墓域であるとみられますが、この地域における古墳時代中期（5世紀）の動向は、全体が調査された事例がなく不明瞭でした。

桜塚古墳群は古墳時代前期から中期にかけて墳長50mを上回る大型の古墳群が継続して営まれます。一方、箕面川流域では古墳時代前期において前方後円墳と推定される待兼山1号墳（4世紀中頃築造、大正年間に消滅）が存在しましたが、古墳時代中期における古墳の築造状況は、わずかに埴輪出土地点が確認されたのみで、詳しい様相はこれまで不明でした。いっぽう、古墳時代後期（6世紀）には、桜塚古墳群での古墳築造が断絶します。対して、待兼山古墳群周辺では二子塚古墳（池田市井口堂、前方後円墳45m）や鉢塚古墳（池田市鉢塚、円墳40m）など、大阪府北部でも有数の有力古墳が築造される地域として発展をとげるのです。

今回、規模が確定した待兼山5号墳は直径15mの円墳であり、同時期の桜塚古墳群と比べて小規模ですが、古相の馬形埴輪を持つなど、地域の有力豪族としての地位はかろうじて維持していたものと考えられます。

この待兼山5号墳を介して推定すると、箕面川を基盤とする勢力は古墳時代前期以降、勢力を弱体化させつつも、古墳時代中期にも連綿と継続し、古墳時代後期（6世紀）に至り、ふたたび勢力を盛り返したという展開をたどることが可能になります。

待兼山丘陵では削平消滅した古墳も含めて、4～5世紀に古墳が途切れなく造られていたことになり、待兼山古墳群が箕面川水系の中心勢力の古墳群であることが確実に became ました。

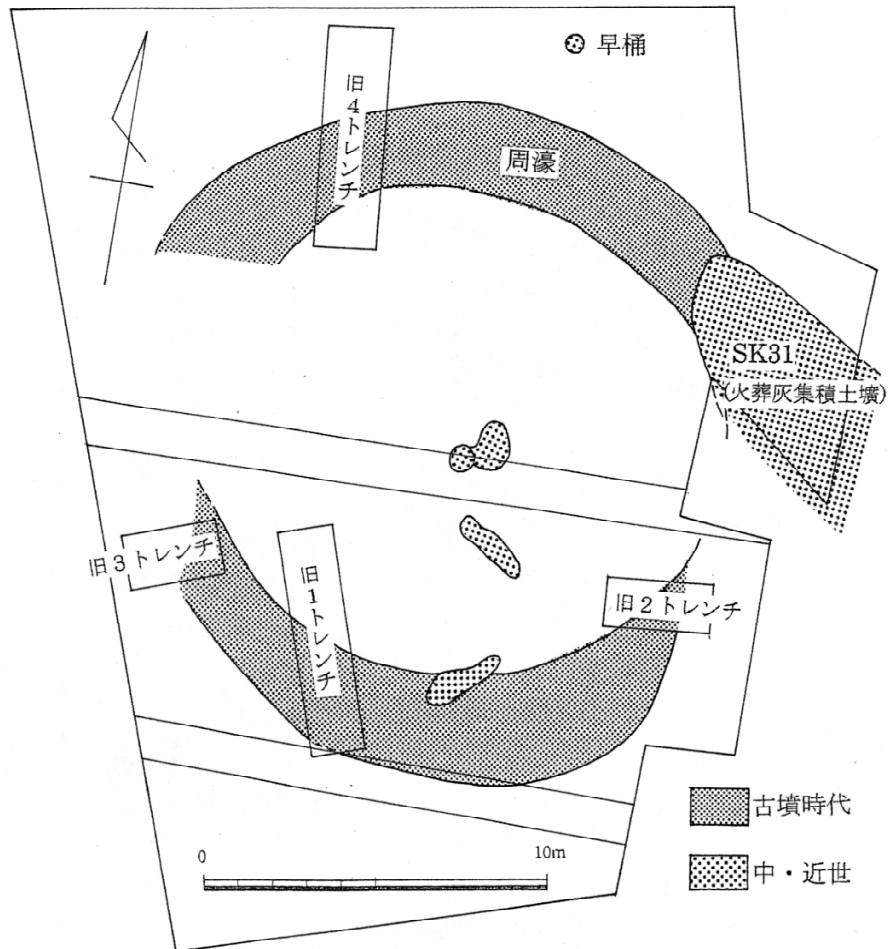


図2 待兼山5号墳

表1 待兼山古墳群でこれまで確認された古墳一覧(位置については下図参照)

待兼山1号墳	前方後円墳か	1910年頃、住宅建設によって消滅。中国鏡・碧玉製腕飾類などを出土。遺物は国指定重要美術品。4世紀後半。
待兼山2号墳	円墳か?	待兼山修学館北東の尾根上に所在。未調査。1987年墳丘測量。
待兼山3号墳	不明	刀根山学生寮北側のテニスコート用地で1987年に古墳跡を確認。埴輪出土。5世紀中頃。
待兼山4号墳	不明	極限科学センター用地で1988年に古墳跡を確認。埴輪出土。5世紀末。
待兼山5号墳	円墳15m	今回の調査古墳。円筒埴輪、馬形埴輪など。5世紀後半。
石塚古墳	不明	阪大正門西側の「大高の森」内で、かつて円筒埴輪出土。5世紀か。

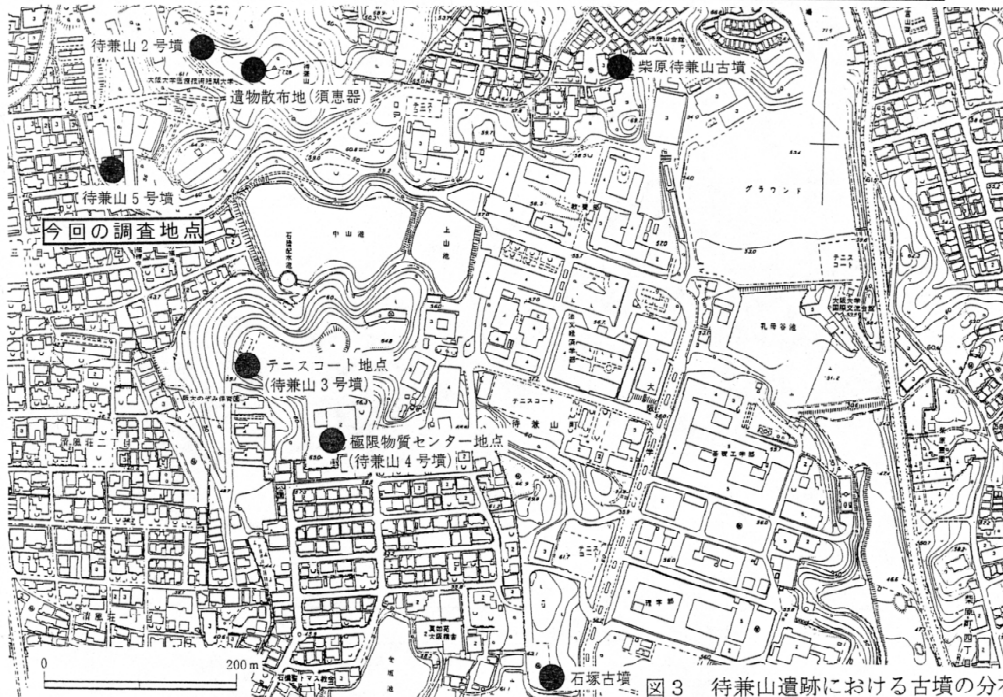
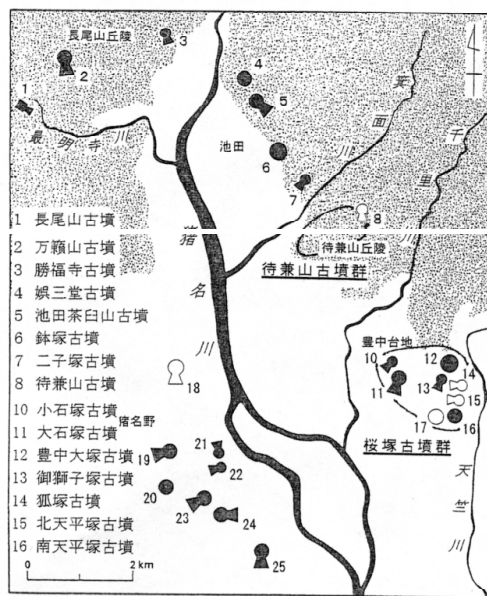


図3 待兼山遺跡における古墳の分布



- 17 線廻塚古墳
- 18 女郎塚古墳(跡)
- 19 御願塚古墳
- 20 柏木古墳
- 21 園田大塚山古墳
- 22 南清水古墳
- 23 池田山古墳
- 24 御園古墳
- 25 伊居太古墳

エリア	豊中台地	待兼山丘陵	池田	長尾山丘陵	猪名野
前	2	待兼山	池田茶白山 62	長尾山 36	
期	3 大石塚 76+		横三堂 27	万願山 54	池田山 71
4	小石塚 40				
中	5 豊中大塚 56				
6	御獅子塚 55				伊居太 92
期	7 狐塚				御願塚 52
8	北天平塚	待兼山5号墳			御園 60
9	南天平塚				南清水 46
後	10 新免2号 23		二子塚 45	勝福寺 40	園田大塚山 44
			鉢塚 40		

図4 猪名川流域の使用古墳の分布と編年(白抜は墳形や時期が未確定)

豊能地域初の5世紀に遡る馬形埴輪頭部を含む多彩な形象埴輪の発見

墳丘は削平されていたため、古墳築造当初の位置をとどめている埴輪は認められないものの、墳丘流出土や周溝埋土中からは、形象埴輪を含む多種多様な埴輪が検出されています。

とくに調査区南西において検出された馬形埴輪頭部片(残存長 25 cm)は、古墳時代中期(5世紀)に遡る事例としては豊能地域では初となる資料です。古墳時代中期の馬形埴輪は大阪府下でも30例に満たず、本例のように頭部の残存状況が良好な事例は約10例しかありません。本例には乗馬の際に馬に装着された顔面の装具(面繫(おもがい))や手綱(引手)が忠実に表現されており、初期の馬形埴輪の形態や当時の飾り馬の装具を推測する資料として重要です。他にも円筒埴輪、家形埴輪、きぬがさ形埴輪が検出されています。



写真1 待兼山5号墳出土 馬形埴輪頭部片(右が口)

豊能地域では2例目となる中世火葬墓群を発見。火葬の際に排出された多量の炭と焼骨片、土器、鉄釘を含む火葬灰集積土坑(長さ6m以上×幅3.6m以上×深さ0.5m)の規模からみて大阪府下でも有数の中世火葬墓群となる可能性。

調査区内で4基の中世火葬墓と火葬灰集積土坑が検出されました。豊能地域の中世火葬墓は箕面市小畑遺跡について2例目の発見です。とくに東端において検出された火葬灰集積土坑(SK 31)は、全長6m以上となる大規模なものです。この遺構については保存が決定したため、一部分の掘削しか実施していません。当遺構からは、数千片の焼骨片とともに瓦器碗(がきわん)や土師器皿、鉄釘などが出土しています。これらの土器型式から、この土坑は13～14世紀にかけて機能していたと考えられます。この火葬灰集積土



写真2 火葬灰集積土坑の検出状況

坑と類似する遺構は、大阪府茨木市栗栖山南(くるすやまみなみ)遺跡(茨木市佐保)においてみつかっています。栗栖山南遺跡では、隣接する火葬場から排出されたとみられる東西約17m・南北約9m、厚さ70cmの炭の堆積が検出されており、周囲に13世紀後半から15世紀にかけて269基の火葬墓が営まれていたことが判明しています。栗栖山南遺跡における火葬墓の様相から推定すると、待兼山遺跡においても調査区外に火葬墓群が広がっている可能性が高いとみられます。

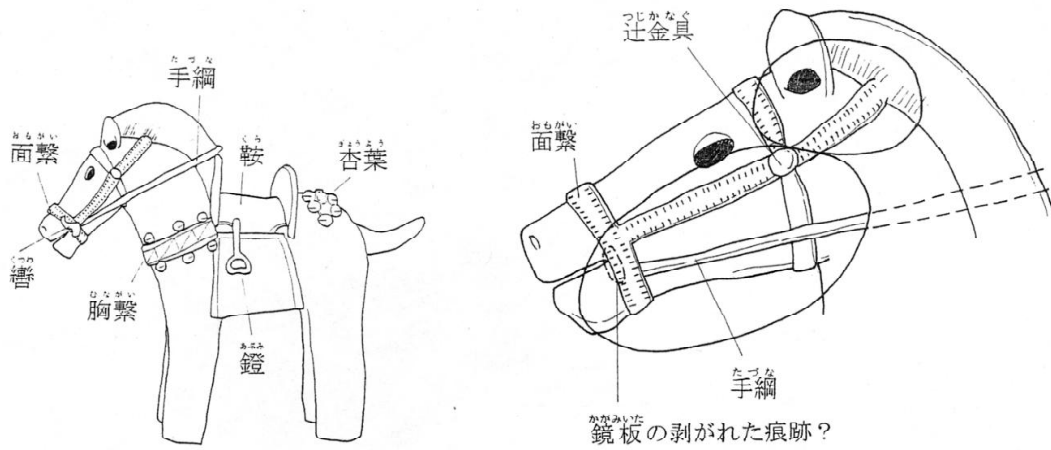


図5 馬形埴輪の部分名称(左:全体模式図 右:待兼山5号墳出土資料頭部復元図)

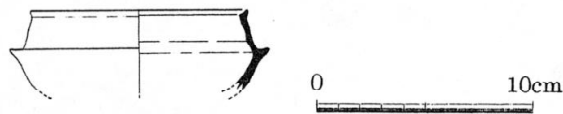


図6 待兼山5号墳出土須恵器

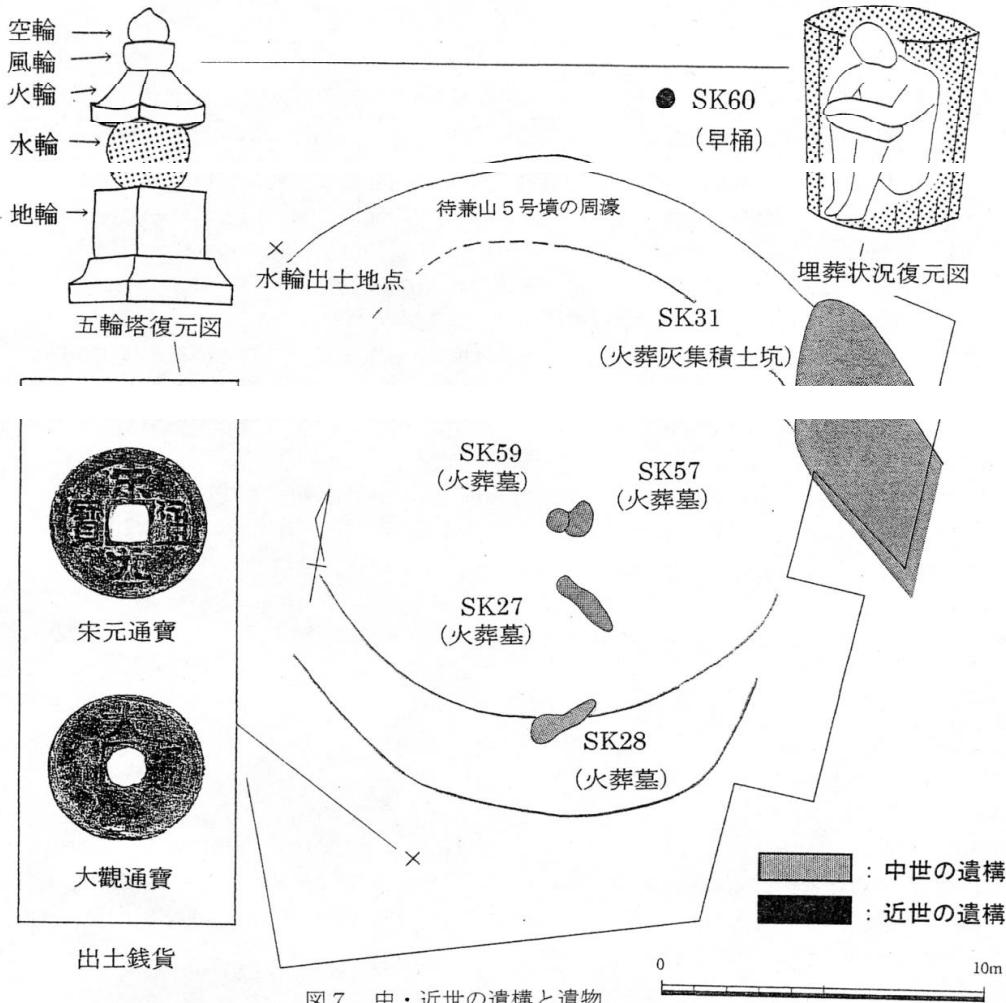


図7 中・近世の遺構と遺物

残りの良い近世墓1基を発見。墓標として五輪塔の転用。

調査区北東からは直径 60 cmの木製桶が検出された。残存高は約 37 cmであり、内部には長径 20 cm程度の川原石とともに五輪塔の一部である直径 25 cm、高さ 20 cmの花崗岩製水輪(すいりん)、そして伊万里焼(いまりやき)の碗と磁器製ミニチュア碗が検出されています。遺骸に関する情報は得られませんでした。このような検出状況から、この木製桶は遺骸を葬ったいわゆる早桶(はやおけ)であったとみられます。また、共伴した伊万里焼の型式から判断すると、この早桶は 18 世紀後葉に営まれたと考えられます。



写真 3 早桶の検出状況

3 まとめ

今回の調査により、これまで不明であった猪名川流域の豊能地域における古墳時代中期(5世紀)の古墳動向が明らかになった点は大きな成果です。15 mの円墳でありながらも古相の馬形埴輪を樹立した5世紀後半の待兼山5号墳の全容が判明したことで、古墳時代前期から中期にかけて権勢を誇る桜塚古墳群の集団に対して、箕面川流域の待兼山古墳群の集団は古墳時代中期には弱体化しながらも有力豪族としての勢力を維持し、後期にはふたたび勢力を伸ばしたという、豊能地域の古墳時代史が描けるようになりました。

また、今回の調査地点の西約 100 mの地点からは、奈良時代の土器棺が 2001 年の調査で見つかっており、今回の中世火葬墓群および近世墓(早桶)を考慮すれば、待兼山遺跡は古墳時代から近世に至る実に 1400 年余の間、地域の墓域として利用されていたことが判明しています。

なお、大阪大学では、今回発見された待兼山5号墳と中世火葬墓群を地中保存する予定であり、解説板の設置や遺構位置の地表表示などによって調査成果が市民の方々にわかるような形での修景整備を検討しています。

今回の調査に際しては、豊中市教育委員会、大阪大学施設部、大阪大学文学研究科考古学研究室、株式会社染の川組のご協力をいただきました。

【図版出典】

図 1 : 大阪大学総合学術博物館HPより、図 2 : 中久保辰夫・田中由理作成、図 3 : 寺前直人 2001「古墳時代中期における倭王権の地域支配方式 - 豊島地域における小古墳の検討を通して - 」『待兼山遺跡』より、図 4 : 福永伸哉 2004「畿内北部地域における前方後円墳の展開と消滅過程」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』平成 13 ~ 15 年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告、図 5 : 田中由理作成、図 6 : 戸根比呂子作成、図 7 : 酒井将史作成